

家近良樹著

『西郷隆盛と幕末維新の政局——体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変——』

高久嶺之介

一 書評の前提および本書の方法論上の特色

本書の書評については、筆者は明らかに力量不足である。

筆者は、幕末維新政治史の専門家ではない。専門家ではないという意味は、先行研究に習熟していないだけではなく、その時期の専門家であれば当然読んでいる史料を読んでいるということがある。ただし、家近氏とは大学院時代からの長い付き合いがあることもあって、氏の著書は、理解の度合に自信はないが、ともかくすべて読んでいる。にわか勉強で一部の史料も読み、幕末維新政治史の素人からの率直な感想と疑問点などを述べる、という形で引き受けた

次第である。

これまでの家近氏の編著や論文を省略し、単著だけを記せば、次のようになる。

『幕末政治と倒幕運動』（吉川弘文館、一九九五年）、『浦上キリシタン流配事件—キリスト教解禁への道—』（吉川弘文館、一九九八年）、『孝明天皇と「一会桑」—幕末・維新の新視点—』（文春新書、二〇〇二年）、『徳川慶喜』（吉川弘文館、二〇〇四年）、『その後の慶喜—大正まで生きた將軍—』（講談社、二〇〇五年）、『幕末の朝廷—若き孝明帝と鷹司閔白—』（中央公論新社、二〇〇七年）

これらの作品から、家近作品の通底にあるものをまず指摘しておく。第一は、氏が結果として幕末維新史の「常識」に挑戦する斬新な作品を生み出したとしても、それは手法としてひたすら「愚直」な史料読みから生まれたものであるということである（氏の「愚直」を示すエピソードはあるが省略する）。第二は、多様なベクトル（氏の言葉によれば「複眼的な視点」）で歴史を描くという方法である。これまでの作品で言えば、江戸の幕府と京都の「一会桑」の違い、国許の会津藩と京都の会津藩の違いという視点、つまり幕府や藩を一枚岩では見ないという視点に表れている。第三は、等身大で人物を描こうとする姿勢（氏の表現では「英雄史観を排す」）である。たとえば、徳川慶喜を、朝幕双方にまたがる出自からくる朝廷を尊崇しながら幕府の中にいるという孤独で冷めた男、徳川宗家に気を遣う男として描き、孝明天皇を、豪胆な攘夷主義者ではなく、周囲への配慮や優しさをみせ、重大な決断を迫られて苦悩する男として描いた。

これらの点は、本書でも共通している。第一の点は、「私の研究手法はごくオーソドックなもの」（三二七頁）「愚直」ともいえる研究手法」（同）と述べているように、『西郷隆

盛全集』ほか史料を徹底的に読み込んでいくことに表れている。第二の点は、島津久光の存在、西郷・大久保の反対派として国許の反対派の分厚い存在、京都藩邸の反対派など薩摩藩を一枚岩として見ない、ということに表れてくる。第三の点では、西郷をけっして英雄的な男としては描かず、むしろ、内面心理上においてきわめてナイーブな男として描いている。

本書でまず確認しておきたいことは、このような従来からの姿勢や手法の共通性である。このことを前提として、従来の作品と違うのは、著者自身の病気の経験が、本書に大きく影響を与えていることである（「おわりに」を参照されたい）。

内容に入る前に、筆者が考える本書の方法論上の特色を記しておく。

第一に、本書の最大の特徴は、史料論としてのおもしろさである。この点では二つのことを言うことができる。一つは、西郷隆盛書簡を読む際、書き出しから末尾まで書簡のすべてを見るところという姿勢をとる。この結果、書簡からともすれば見過ごされがちな病気の記述を「発見」する。もう一つは、『鹿児島県史料 忠義公史料』のおもしろさとそ

の編集者である市来四郎の能力を「発見」したことである。後述するように、市来の姿勢を通して、この史料には、けつして維新における西郷・大久保の行動を美化・賞賛する姿勢だけではない、ある種「公平」な視点が見られるという点の「発見」である。

第二に、体調不良（病氣）が歴史過程に及ぼす影響というユニークな視点である。本書では、歴史過程での重要な局面において、当事者（西郷・小松帯刀・島津久光など）の体調不良（病氣）が歴史過程に及ぼした影響を明らかにする。具体的には、①慶応三年の大政奉還後の小松・西郷・大久保の国許への帰国から翌年一月三日の鳥羽・伏見の戦いの間の小松帯刀・島津久光の病氣が薩摩藩の意思決定に及ぼした決定的意味、②明治六年征韓論紛争時の西郷の異常行動の背景に、西郷の体調不良（病氣）の影響を見る、などである。これは、従来明治維新史研究史上まったく見られなかった新しい踏み込み方である。

第三は、かなり大胆に内面心理まで踏み込んだことである。筆者は、家近氏のこれまでの作品で、西郷の性格分析という形でここまで内面心理に踏み込んだ分析を見たことがない。内面心理の分析は、とすれば、主観的という批

判も避けられない。しかし、そのような批判があっても、家近氏が内面心理に踏み込んだのは、明治六年政変時の西郷の行動にある種の異常性（死への志向性）のようなものを史料上読み込んだからであろう。もう一つおもしろいのは、家近氏が必ずしも明示しているわけではないが「被害者意識」という形の集団心理である。本書では、慶応三年末の江戸薩摩藩邸焼き討ち事件が薩摩の人々にもたらした影響、つまりこの結果、京都の薩摩藩邸「全体」が武力倒幕で動くようになるという点が重視される。この点は、西南戦争の原因となる西郷「暗殺未遂」、昭和初期の満州事変とその前に起こった中村大尉事件、万宝山事件を想起した時、説得的であった。

二 本書の内容の紹介

本書は、第Ⅰ部「西郷隆盛の体調不良とストレス源」と、第Ⅱ部「慶応期の中央政局と薩摩藩」の二部構成からなるが、構成ときわめて簡単な紹介をまず記しておこう。

・はじめに―幕末維新史の再構築に向けて

ここでは、第Ⅰ部・第Ⅱ部の意図と問題意識が記される。第Ⅰ部は、「従来、注目されることのなかった西郷隆盛の体

調不良に関心を払い、『明治六年政変』が勃発するに至ったそもその理由(背景)を探ろうとしたものであり、この問題意識は、「日本の歴史があまりにも健康者中心の視点で叙述されてきたと思わられた」という点にある。

第Ⅱ部は、「西郷のストレス源をたどろうとする過程で改めて浮かび上がってきた幕末政治史最大の研究課題の解明に取り組んだもの」、すなわち「薩摩・長州の両藩が、何時の時点で武力倒幕を決意したのかという問題の解明」である。このために、薩摩藩内西郷・大久保反対派に注目し、この問題の解明によって、西郷や大久保らの動向をもって薩摩藩のそれと見なす視点の克服、そして「最終的には薩長連合史観の克服を目指したもの」という意図が示される。

・第Ⅰ部 西郷隆盛の体調不良とストレス源

・第一章 西郷隆盛の体調不良と「明治六年政変」

西郷が明治六年に朝鮮使節を志願した理由および背景を改めて明らかにする。征韓論紛争の政治史を分析しながら、明治六年当時の西郷は「征韓論者であった可能性が大」であるとする。ともに、西郷の異常な状況(体調不良→死への志向性)を浮き彫りにする。

・第二章 西郷隆盛のストレス源

西郷の個性(資質)を明らかにするとともに、西郷の「体調不良の歴史」とストレス源(とりわけ島津久光というストレス源)を幕末から経過を踏まえて明らかにする。

・第Ⅱ部 慶応期の中央政局と薩摩藩

・第三章 薩長盟約と西郷隆盛

慶応二年一月の薩長盟約をめぐる、基礎史料の見直しをおこない、本格的な分析がなされてこなかった薩摩側の動向を中心として、盟約問題を見直そうとしたのが本章である。西郷が当時とつた対応の謎(1. 有名な「六カ条」が木戸に提示されたが、これを明文化した約定書の類が木戸に手渡されなかったのは何故か。2. 盟約に関する史料が薩摩側になくのは何故か)を分析し、問題を解く鍵として、盟約締結の直前に出された島津久光の指令について検討する。

・第四章 慶応二・三年の政治状況と薩摩藩

薩摩藩の慶応二・三年時点での動向に焦点を絞って分析し、「薩摩藩の政治運動を扱ったこれまでの研究では、大久保や西郷らの動向をもって薩摩藩のそれと見なす視点」を批判するとともに、「薩摩藩が藩全体の総意として武力倒幕を視野に入れ、かつそれを実行に移そうとしたのは何時の時点かといった問題意識のもと論を進める」(一五一頁)。こ

ここでは、島津久光の存在に改めて着目するとともに島津久光・小松帯刀の病気のもった意味および西郷・大久保反対派のもった意味の大きさを検証する。この分析にあたっては、明治期に薩摩藩の歴史編さんに携わった市来四郎の記述に注目し、新たな解釈を提示する。

・補章 「台湾出兵」方針の転換と長州派の反対運動

明治七年四月の西郷従道による台湾出兵がどのような経緯をたどって実施に移されたかを詳しく分析する。主張点は、大久保と木戸らとの間に台湾出兵をめぐる本質的な意見の対立は存在しなかったとし、大久保政権の対アジア政策の性格は、征韓論やロシア流の力の政策とは異質の原理に基づくものであった（征台の役の全過程を通じて、大久保の内治優先論者としての性格は基本的に損なわれなかった）とする。

三 いくつかの論点

以下、筆者の興味のままに、いくつかの論点を抽出し、それについて意見を述べたい。

(1) 薩長盟約の評価について

薩長盟約の評価については、青山忠正氏の研究以降、この盟約を倒幕軍事同盟ではなく、長州藩の「冤罪」をすくぐために薩摩藩が尽力するという性格のものだという説が有力になっている。家近氏の場合も、この盟約が倒幕軍事同盟ではないという点は、現在有力な説と同一線上にあるが、さらに「今まで全く注目されてこなかった」慶応元年二月二六日付桂右衛門（久武）から久光側近の島津求馬・伊集院左中ほかに宛てた書簡によって新たな解釈を試みる。すなわち、この書簡から次のように読み取っていく。国許にいた島津久光が西郷らの強硬路線に強い危機感を抱き、家老の桂久武を京都に派遣し、教誡を試み、この結果西郷のみならず全員久光の指示に従うことに同意した。したがって西郷らが倒幕軍事同盟など「過激」なことができたはずがない。また、「桂久武が京都に派遣された最大の目的が、久光の指令を伝えること以外に、どうやら西郷を伴っての帰国にもあつたらしい」（一三六頁）「芳即正氏によれば、桂久武が西郷を同伴して帰国しようとしたのは、西郷の独断専行によって行なわれた江戸薩摩藩邸の事務局撤廃および藩邸内奥女中の引き取り（大量削減）計画（西郷は江戸の藩

邸を不要だとした)が島津久光の怒りを買ったためだという。(中略)もつとも、私は、こうした理由以外に、西郷の過激な言動が国許に伝わり、久光が警戒心を強めたことが、より大きく与ったと考える」(二八八頁)。

もちろん、家近氏は、この書簡だけで論をすすめるのではなく、次のようないくつかの傍証も用意する。①慶応元年一〇月二〇日付伊地知壯之丞宛市来六左衛門書簡↓この段階で、久光は、「軽拳無謀」を戒める教諭書を在京藩士に出していた、②慶応元年一二月二六日付蓑田伝兵衛宛西郷書簡↓桂から伝えられた(久光の)「思召を以テ御教諭の御事」は謹んで遵法するのでご安心ください、との内容、③慶応元年一二月一七日付島津久光宛伊達宗城書簡↓西郷らが宇和島に派遣した使者から説明を受けた宗城が、西郷が「頗暴論」、すなわち拳兵路線に舵を切ったとどうやらうけとめたということ、島津父子がそうした拳兵路線とは距離を置いていると宗城が認識していた、という内容、④上洛してきた木戸と濃密に接触した桂久武の日記には、盟約について何の記述もない、⑤慶応二年二月六日付伊地知壯之丞宛桂久武書簡↓「永逗留大屈イタシ候」、⑥慶応二年二月一三日付柴山良助宛薩摩藩江戸留守居役堀直太郎書簡、二

月一八日付蓑田伝兵衛宛西郷隆盛書簡に、薩長盟約を示唆するような内容はない、など。

家近氏の主張は、島津久光の意向を無視して、西郷らが薩摩藩の軍事倒幕路線を決定できるわけではない、という至極当然なことを主張しているわけであるが、私には傍証の史料を含めて考えれば説得的であった。ただ桂の書簡は久光が過激な行動をしないように言ったということを明確に書いているわけではないので、今後、この書簡をめぐる別の解釈が出てくるかもしれない、とも感じた。ともあれ、家近氏が、第三章の末尾で、「いずれにせよ、我々は薩長盟約について知悉しているようにでいて、実はそうでもないのである」(一五〇頁)と記している点も説得的である。

(2) 西郷の個性(資質)と「病氣」について

家近氏は、西郷隆盛の個性について、西郷についてのさまざまな評価(重野安繹や市来四郎ら西郷に好意を持っている人物を含めて)をもとに第二章第一節で詳述している。従来の西郷評価を変える内容を含むため、これが実におもしろい。たとえば、次のような内容である。「刺激を大層好む人物」、「若い時分から、けっして人格円満な人物のそれと

は言い難い生活」、「目配り・気配りの凄い、きめ細やかな感情の持ち主」、「繊細な感覚の持ち主」、「時として激情家に変身」、「西郷は、本来感情の豊かな人間味に溢れた人物」、「そのぶん、人の好き嫌いやも激しくなり、時に敵と見方を峻別し、敵を非常に憎むことにもつながった」、「西郷は本質的に好悪の感情が強く、けっして清濁併せ呑むといったタイプの人物ではなかった」、「これは西郷がそれだけ深く他人と関わられたがゆえの反動」、「愛されることも多かった（特に目下の者についてはそう言えた）」、「緻密かつ論理的・組織的な頭脳（理詰め性格）の持ち主」、「天性といってもよい策略（戦略）好きにつながる」、「策謀家・戦略家」、「熟慮するあまり過慮におちいり、策を弄しては失敗することがままあった」、「こうした容易に他人に信をおけないタイプの間は、当然相手の行為をめぐって憶測をたくましくし、そのことで強いストレスを受ける羽目になる」。

従来西郷像はつかみにくかつたらしく、作家司馬遼太郎は、『翔ぶが如く』の「書きおえて」の中で、「この作品では、最初から最後まで、西郷自身も気づいていた西郷という虚像が歩いている」と書いた。要するに、とりわけ明治以降は実像がつかみにくい男ということであろう。これに

対し、家近氏の西郷像は、幕末から明治にかけて長いスパンで西郷を見て、知性・策謀・繊細さを併せ持ち、ストレスゆえに死への志向性を持つ人間味のある人物として描いている。つまりは「英雄」としては描いていない。これも納得がいく。ただし、筆者が京都の幕末時の町人の日記を見る限り西郷の記述はなく、その意味で西郷は庶民的には無名であったが、明治になって急速に有名人になり、他人の眼もより意識するようになっていったのではないかと思われる。幕末から明治にかけて西郷の個性に変化がないのか。その点は気になる。

ともあれ、家近氏は、西郷が明治六年に突然遣韓使節を希望した理由を、「病氣」による変調、死への志向性に見る。家近氏は、「当時の西郷は少し精神に変調をきたしかけていた（狂気の世界に入りかけていた）」と判断せざるを得ない（三八頁）、という。明治六年政変時の西郷の言動を異常と見る見方は、筆者の知る限りでも高橋秀直氏・猪飼隆明氏なども指摘しているが、死への志向性をより明示的に記したのは姜範錫氏であろう。家近氏の場合、死への志向性がなぜ生じたのかを含めて描いたという特徴がある。

ところで、家近氏は、西郷の病状について、「腹痛」によ

るひどい下痢症状、「下血」(ストレスからくる原因、過敏性腸症候群)、「胸痛」(心臓、食道、ストレス、たばこなどが考えられる)とするが、「西郷を苦しめることになった病気の原因を探ったが、残念ながら彼の治療カルテ等の類は残存していないのでその原因は特定できない」(八七頁)、とする。要するに、西郷の「病氣」が、彼の行動にどのような影響を与えたかは、明確にはわからない。内面心理の分析は難しい。したがって、この内面心理の分析では、これまでの家近氏には珍しく推測(書き過ぎ?)の箇所が多くなる。筆者がここまで書く必要があるかと思つた箇所がいくつもある。一点だけ挙げれば、第二章の末尾の次のような箇所である。

遣外使節団の団長であつた岩倉具視の帰朝が視野の内に入るようになった状況下、西郷が内政の指導権を岩倉以下に渡すことを決意し、新たな選択を行なつた可能性は充分にある。(中略) バトン・タッチをする時は確実に近づき、西郷は近いうちに自由な行動が採れることを容易に想定しうるようになったのである。西郷が、この機会に自身の跡始末をつけて、人生にサヨナラをする気持ちになつたとしても一向におかしくはな

い。そして、その門戸を開くルートとして、彼の中に位置づけられたのが朝鮮使節への志願であつたと考えられる。(一〇四頁)

死への志向性はあつたとしても、「バトン・タッチ」という意識まであつたかどうか。

なお、明治六年政変についての研究史上の本書の位置について付随的に触れておきたい。毛利敏彦氏が、大久保の政治的意図が、大蔵省の紛議問題に関連して、司法省ならびに江藤新平の排除というものであつたものに対して、家近氏は、大久保の意図としては、内治優先のための対外強硬派の排除にあり、それに木戸や伊藤による江藤らの排除の利害が一致したと見る。この点で思い出すのは、家近氏が、一九八一年に発表した『明治六年政変』と大久保利通の政治的意図―毛利敏彦説にたいする疑問―(『日本史研究』二三三号)という論文である。一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて明治六年政変について毛利説が学会を席捲していたと思われるが、おそらくこの論文が研究史上本格的に毛利説を批判した最初の論文であり、しかも敬意と節度をもって批判していたことを筆者は印象的に覚えている。

(3) 王政復古クーデターから鳥羽・伏見の戦いまでの政治過程で薩摩はどう動いたのか

筆者が本書中もつとも興味をひかれたのが第四章、すなわち王政復古クーデターから鳥羽・伏見の戦いにいたる政治過程の中で薩摩藩の個人、集団がどう動いたのかという部分である。本書の特徴は、自己の研究（『幕末政治と倒幕運動』）および原口清氏（『戊辰戦争』）・高橋秀直氏（『幕末維新の政治と天皇』）の研究の地平は受け継ぎながらも、高橋氏のように「薩摩藩」を原則として一つのものとして把握せず、薩摩藩内部を、西郷・大久保系、小松帯刀、京都藩邸内反西郷・大久保派、島津久光、国許反西郷・大久保派のように、複数のグループ、個人のせめぎ合いの中で描いた、という点にある。薩摩藩内西郷・大久保反対派の存在とその役割については、先行研究として、高橋裕文「武力倒幕方針をめぐる薩摩藩内反対派の動向」（家近良樹編『もうひとつの明治維新—幕末史の再検討—』）があり、家近氏は、この研究を充分参照しながら、さらに王政復古クーデター後の薩摩藩の動向、市来四郎の視点、島津久光の病気などを加えながら、より長いスパンと広い位置から再構成したといえようか。ともあれ、薩摩藩内にさまざまなグループ

があり、島津久光がいる以上、薩摩藩が藩の意思として武力倒幕路線をとるのは困難であった、ということになる。

ただし、家近氏は、この時期の薩摩藩の動向を知る上での実証上の困難について次のように言う。「島津久光の政治的意図や個人的な感情・思惑の分析が、史料上の制約もあって存外難しい」、「さらに久光は、最終的な決断を求められた際、自らの意思を必ずしも明確な形で鮮明にしないことがあった」（二五二頁）。このため、家近氏は、「従来、薩摩藩の国家意思と見られているもののうち、大久保や西郷らの個人的な希望に止まるものを峻別する作業を行なう」（一五三頁）。ただし、慶応三年一〇月以降の久光の意思は、実はわかりにくい。筆者自身も、体調不良とはいえ、茂久の京都派遣が決定を見た時点で西郷の従軍を差しとめた久光が、西郷擁護論があったとはいえ結局西郷の随行を認めてしまおうという心事はなかなか説明が難しいと思った。やはり、久光の病気、あるいはそれもあつての情況追隨に原因を求めるしかないか。

ともあれ、家近氏の論を展開させれば、島津久光と小松帯刀の体調悪化の結果、王政復古のクーデター前後より、「島津久光—小松帯刀ラインに代わり、島津茂久—大久保利

通・西郷隆盛ラインが藩政の主導権を掌握するようになった」（二二〇頁）。しかし、クーデター後、新政府の中で薩摩藩自体が他の四藩に追い込まれ、「大久保と西郷の両人が孤立して絶望的な状況に陥」いることになる。これを一挙に逆転させる事件が二月二十五日の江戸薩摩藩邸焼き討ち事件で、家近氏は、「市来四郎君自叙伝」の「此挙京都に開ゆ、本藩戦意を決す、翌年一月三日の開戦を見たるは、此挙の発因に依れり」の記述から、これが「薩摩藩の藩を挙げての対幕戦決行の決意を固めさせることになる」（二二二頁）、と薩摩藩の武力倒幕路線への転換をこの時点とする。筆者には、論の展開からして説得的に思えた。ただし、市来の記述は短いものであり、この記述はあくまで鳥羽・伏見の戦いを念頭に置いたものとして薩摩藩の武力倒幕路線の確定は従来通りそれ以前であるという解釈も今後出てくるかもしれない。

（4）市来四郎の編さん時の立ち位置について

本書では、『鹿児島県史料 忠義公史料』を編さんした市来の編さんの特徴として、次の点が指摘される。①市来は保守（守旧）主義者ではない、②薩長対徳川という対立の

構図（図式）が見られず、広く他藩や旧幕府・朝廷関係者の史料を探索している、③長州藩に対する醒めた視点がある、④西郷や大久保の動向を批判する史料が含まれる、⑤市来の歴史認識（記述）には、島津久光のそれを反映した面（箇所）が少なかつたであろうと推測され、藩の方針を最終的に決定する立場にあつた島津久光と「当代最高の歴史家の一人」であつた市来四郎の「体験と歴史観が結びついて成つたのが、『忠義公史料』等の史料」（二六四頁）である、とする。卓見である。

ただし、市来の編さんには気になることもある。『忠義公史料』が編さんされたのは明治二一～二三年（追加訂正は二三年）のようであるが、「例言」に「原編者市来四郎の掲げた見出しはそのまま掲げ、見出しを欠くときには、新しく（一）で掲げた」とあり、本書で頻出する第四巻の見出しには、「当時俗論ノ説 鹿児島ニテ」（慶応二年四月二十九日、傍線筆者、以下同じ）、「道島家記抄 佐幕ノ俗論」（慶応二年六月二二日）、「討幕説停止論達」（慶応三年九月二八日）、「佐幕論者建言ニ就テ御訓論」（慶応三年一〇月）、「鹿児島ノ形勢及ヒ俗論党ノ流言」（慶応三年）という見出しがある。この傍線部分の見出しのつけ方は、当然明治中期の市来の価

値観と心事が投影されているが、基本としては薩摩の武力倒幕を正当化する意図があったと思われる。この点について、若干家近氏の言及があったほうが市来の位置づけがより説得的になったと思う。

四 付随的なこと

二〇一二年に刊行された高村直助『小松帯刀』（吉川弘文館）は、小松についての最初の本格的な研究書であるが、その中で「小松帯刀に即して幕末の史料を読み進むうちに、大政奉還前後の時期の西郷・大久保らの『討幕』計画は、現実に乏しく自爆に終わる恐れが大きく、同時代の薩摩藩幹部からも『兎戯に等し』と評されていたことがわかってきた」（はじめに）六頁、とする。また大政奉還前後の時期、「出兵の先に武力討幕を見据えていた西郷・大久保と、武力の威圧のなかでの新政権樹立という無血革命を目論んでいた小松との差があったとしても、西郷・大久保も藩内情勢が声を大に『討幕』を唱えられる状況でないことがわかっていた以上、『同床異夢』ならぬ『異夢同床』と言おうか、この時点で両者が対立し合うことはなかったのである」（二二三頁、傍線筆者）、とする。西郷・大久保の「過激」路

線が自爆の可能性が高く、大政奉還前後の時期でも、薩摩藩が武力倒幕路線を公然ととることができないという点では、高村氏の新著は家近氏の本書に近い位置にいるのが印象的であった。

国民的常識からすれば、西郷も大久保もある種の「英雄」として遇されることが多いと思うが、一つ間違えれば、幕末の「過激派」として葬りさられた可能性がある。また江戸薩摩藩邸焼き討ち事件や当事者の病気などさまざまな偶発的な事件が、予想もできない展開を示す場合がある。そういう歴史のおもしろさを再発見させ、知的刺激が盛りだくさんに詰め込まれたのが本書である。また、学会の通説とはかなり異なる挑戦的な見解を「愚直」な史料操作で展開した本書は、いかにも家近氏らしさがみなぎった本である。

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書第一九冊

家近良樹著『西郷隆盛と幕末維新の政局―体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変―』（ミネルヴァ書房、二〇一一年五月刊、A5判、三四〇頁、本体価格五、〇〇〇円）

（たかく れいのすけ・京都橋大学文学部教授

〔編集委員会注記〕本稿は二〇二二年四月一四日、大阪経済大学にて著者の家近良樹氏を交えて行われた書評会（第六六回経済史研究会）での報告を基に執筆していただいたものである。